

## Incentive と Sustainability : シリアで考えたこと

シリアで農業普及員の訓練に関わる業務を担当しているが、各種訓練コースの実施に伴って、「Incentive」（動機付け）と称してコース参加者に日当を配ることが常識化している。このようにお金を渡すことによって訓練コースへの参加を促し、訓練の効果をあげるためと彼らは「解説」するが、Incentive を渡すことによって参加者を動員している、とも言える。背景には公務員の給料が安いということもあるが、お金を払うことが「訓練の形骸化」に一層拍車をかけている、という気もする。結局、お金をもらえるから参加するわけで、「中身は二の次」になってしまっているのではないかと。同じように、最近住民参加型の開発が注目されているが、ここでも似たようなことが行われている場合がある。「住民参加型開発」では文字通り、「住民」の「参加」がプロジェクトの実施及び成功のために不可欠であるが、現実には「地域住民の自発的な活動」というより、金銭的魅力（Incentive）で地域住民をプロジェクトに動員している（住民に参加してもらっている）、といった例も見られる。

これは、好意的に見れば「Incentive」は限られた期間に一定の成果を出すために必要な手段であるし、また多くの場合住民の労働に対して対価を払っているわけで、「雇用の創出」という面があるとも言える。しかし、Incentive が与える影響は短期的なものだけでなく、長期的な影響も考えるべきであろう。「限られた期間に一定の成果を出す」というのは、プロジェクト実施側の都合ではないのか。プロジェクトが実施されている間は予算もあるし、住民に金銭的 Incentive を与えることはできるが、そのプロジェクトが終了したあとは「金の切れ目が縁の切れ目」になりはしないか。だとすればプロジェクトの持続性（Sustainability）を考えた場合、短期的成果を求めるための Incentive は長期的にはマイナスの影響を与えるのではないかと。もちろん、ドナー側としては人材、資金、機材を投入してプロジェクトを実施しているわけで、限られた期間での成果の「評価」を行う必要もあるだろう。しかし、プロジェクト担当者の「実績」のためにプロジェクトの Sustainability を犠牲にしてもいいのか、という疑問は残る。

Sustainability に対する影響の他に、Incentive が与える別の弊害もある。それをシリアの植林における例で見てみる。シリアでは森林面積（現在、国土の約 3%）の増加を目的として、植林を行っているが、植林作業には地域の住民を労働者として雇用し、雇用創出を図りながら住民参加の植林活動を実施している。これは一見理想的な姿にも思えるが、植林に関連して問題となっているのは山火事の発生である。これは煙草の火の不始末等の不注意もあるが、「放火」も一つの原因となっているようだ。つまり、植林が終わってしまえば仕事がなくなるが、山火事を起こして燃やしてしまえばそれが新たな雇用の創出につながるわけだ。これでは何のための植林かわからない。

さて、このような「実態」の中でいったい何ができるのか？ 「特効薬」のようないい案はないのかもしれないが、参加型開発プロジェクトあるいはトレーニングの内容を少しでも住民や参加者のニーズに合ったもの、魅力的なものにしていくことは重要な要素であろう。また、あえて短期的な成果を求めず、長期的な展望の中で仕事をする、という姿勢も必要かもしれない。（在シリア：湖東）



農民からの聞き取り調査



訓練センターにおける講義風景



ドリップ灌漑の訓練コース